中学校美術科の内容と指導に関する研究（1）
―中学校美術科教科書をもとに―

小　江　和　樹*

（2016 年 10 月 25 日　受理）

A study on the contents and guidance of junior high school fine arts (1)
― Based on a junior high school course of fine arts textbook ―

OE Kazuki

要約

本研究は、中学校美術科の目標と内容について明らかにし、具体的な教材による授業構想とその実践を通して、中学校美術科の指導法を確立することを目的としている。

その最初の段階として本稿では、中学校美術科教科書に焦点を当て、中学校美術科教科書に取り上げられている教材（題材）の内容について、それぞれの領域・分野ごとに考察を行い、その傾向や特徴、ねらいを明らかにしたものである。その結果、中学校美術科の各領域、分野で取り上げられている学習主題や学習活動、材料や技能について、そして学年が進むにつれて広がり、深まっていく具体的な内容の傾向と特徴が明らかになった。

キーワード：中学校美術科、教科書、指導法

1. はじめに

本研究では、中学校美術科の目標と内容について明らかにし、具体的な教材による授業構想とその実践を通して、中学校美術科の各領域、分野における指導上のポイントを明らかにし、指導法を確立することを目的としている。

そこで、まず本稿では、中学校学習指導要領美術編をもとに編集されている中学校美術科教科

＊　鹿児島大学教育学系　教授

書の考察を通して、中学校美術科の教科目標や表現、鑑賞の各領域の題材のねらいや内容を明らかにし、授業構想や指導法を確立していくための基礎研究として位置づけることを目的としている。

2. 研究方法

本研究は、次に示す方法により、進めていくことにする。

(1) 教科書をもとにした中学校美術科のねらいや内容についての考察

(2) 表現領域の題材における指導法についての考察

(3) 鑑賞領域の題材における指導法についての考察

3. 中学校美術科教科書についての考察

中学校美術科教科書に取り上げられている教材（題材）の内容について、それぞれの領域・分野ごとに、①学習主題や学習活動に関すること、②材料や技能に関すること、の2つの観点から考察を行い、その傾向や特徴、ねらいを明らかにする。

〔表現領域〕

(1) 絵や彫刻など

絵画表現を描く対象によって分類すると、静物や人物、風景などを描く「観察表現」と内的なイメージや想像によって描く「想像表現」がある。

また彫刻表現は、表現方法で分類すると、材料を彫ったり削ったりする「彫刻」と粘土などで造形する「塑像」に分けられる。

表1　絵や彫刻など

教科書	主として絵画表現	主として彫刻表現
美術1	●見て感じて、描く ●なぜか気になる情景 ●心に残ったできごと ●身近な人を見つめて ●刷って出会う美しさ	●身近なものを立体で表そう ●材料と対話して
美術2・3上	●新鮮な視点でとらえよう ●響き合う言葉と絵 ●墨が生み出す豊かな世界	●しぐさで語る動物たち ●瞬間の美しさを形に
	◎心でとらえたイメージ	
美術2・3下	●空想の世界への誘い ●一瞬の光をとらえて ●問題意識を形に	●イメージを形で表現しよう
	◎私との対話 ◎共同制作の魅力	

絵や彫刻などの表現は、主として絵画表現、主として彫刻表現に分けられている。

①学習主題や学習活動に関すること

美術1の絵画表現では、観察表現としては、自然物や人工物など身近なもののスケッチや見慣れている場所や目にとまる情景、身近な人などが、想像表現としては、思い出の情景や場面などが主題として取り上げられている。また彫刻表現では、身近なものの形や色を観察し、粘土を用いてそっくりに表現したり、様々な材料を組み合わせて発想を広げて表現したりすることなどが主題として取り上げられている。

美術2・3上の絵画表現では、身近な風景を違う視点で見つめて描くことで、色々な見方で表すことの経験や言葉と絵を重ね合わせて新しいイメージをつくること、さらに墨の性質や技法に触れながらイメージを広げていく墨を用いた様々な表現などが、主題として取り上げられている。また彫刻表現では、生命を感じる動きやしぐさ、躍動感の表現の追求が、主題として取り上げられている。

美術2・3下の絵画表現では、観察表現としては、自分自身を表現する自画像、光をとらえながら時間とともに変化する風景の表現、想像表現としては、錯視やだまし絵、空想の世界など、時空を超えた世界の表現などが、主題として取り上げられている。また彫刻表現では、自分がとらえたイメージを単純化したり強調したりしながら表現すること、仲間と協力してつくる共同制作などが、主題として取り上げられている。

②材料や技能に関すること

絵画表現では全学年を通して使用している主な描画用紙は画用紙類であり、描画材では、鉛筆、色鉛筆、ペン、パステル、水彩絵の具、アクリル絵の具などである。これらに加えて美術1では、モダンテクニックの理解や版画表現における版種の特徴の理解とともに、コラージュやドライポイント、一版多色版画、ステンシルなども取り上げられている。また美術2・3上では、写真やコンピュータによる映像表現や和紙や色紙に描く墨を用いた表現も取り上げられている。

彫刻表現では全学年を通して使用している材料としては加工粘土があり、アクリル絵の具で彩色して表現している。また表現する対象や主題に応じて、石、木、葉、枝などの自然物や金属、針金、毛糸、石膏、発砲スチロールなども使用されている。

なお、美術2・3上の「心でとらえたイメージ」では、平面的な表現や立体的な表現、美術2・3下の「私との対話」では、自画像としての表現や自刻像としての表現、「共同制作の魅力」での立体表現に加え、アニメーション表現に見られるように、学習主題を重視して表現技法を限定しない題材も取り上げられている。

(2) デザインや工芸など

デザイン表現は、装飾や伝達を主とした「視覚伝達デザイン」と生産的なモノをつくり使用を目的とした「道具（プロダクト）デザイン」に分けられる。

また工芸表現は、素材（材料）の特性を生かしながら機能性や実用性に美的要素を兼ね備えたものである。中学校で多く用いられている素材や技法としては、「木、紙、粘土、金属、染織」である。

表2　デザインや工芸など

教科書	主としてデザイン表現	主として工芸表現
美術1	●美しい構成と装飾 ●楽しく伝える文字のデザイン ●記憶に残るシンボルマーク ●一枚の紙から広がる世界 ●私の気持ちをカードに込めて	●使いたくなる焼き物をつくろう ●暮らしに息づく木の命
美術2・3上	●情報をわかりやすく伝えよう ●豊かなイメージで伝えよう ●やさしさのデザイン	●日本の美意識 ●手づくりを味わう喜び
美術2・3下	●魅力が伝わるパッケージ ●光と影の空間演出 ●自分たちの生活の場を飾ろう ●デザインと環境	●生活を彩る染めの味わい ●暮らしを心地よくするインテリア

デザインや工芸などの表現は、主としてデザイン表現、主として工芸表現に分けられている。

①学習主題や学習活動に関すること

美術1のデザイン表現では、平面的な表現としては、形や配色を工夫しながら身近な自然物の特徴をとらえて美しく構成することや伝えるための文字のデザイン、シンボルマークの制作などが取り上げられている。立体的な表現としては、一枚の紙を加工して美しい構成や使えるものを制作するもの、ポップアップカードなども取り上げられている。また工芸表現では、陶土による用途や機能を追求した美しくて使いやすい器の制作、木の特性を理解して用途に適した性質の素材を選び、よさを手で味わって制作することなどが取り上げられている。

美術2・3上のデザイン表現では、平面的な表現を中心に、伝達のためのデザインについて触れ、ピクトグラム、サイン計画、イラストレーション、ポスターやブックカバーのデザインなど、さらに「やさしさのデザイン」として、ユニバーサルデザインについても取り上げられている。また工芸表現では、自然の形体や材料を生かした表現をもとに、日本の風土で育まれてきた美意識を考えながら生活を彩るものを制作するためのアイデアスケッチや掛け軸、扇子などの図柄の制作、木、革、各種金属など、材料の特性を生かした表現が取り上げられている。

美術2・3下のデザイン表現では、立体的な表現を中心に、形体や装飾を工夫したパッケージデザイン、光や影をテーマとした照明や空間のデザイン、さらにデザインと環境との関連についても取り上げられている。また工芸表現では、美しい色と模様の使えるものを主題に、草木染めなどの染色、使う人や場所の雰囲気を考えた表現などが取り上げられている。

②材料や技能に関すること

デザイン表現では全学年を通して使用している材料として、鉛筆、色鉛筆、ペン、アクリル絵の具などが、アイデアスケッチから制作まで幅広く用いられている。材料としては、紙類をはじめ、加工粘土、針金やカラーセロハン、竹、木、和紙などが用いられ、さらに試作制作やアイデアのプレゼンテーションなどの活動も取り上げられている。

工芸表現では、美術1で、ひもづくりや板づくりなど目的に応じた技法を用いた陶土による表現や各種の木材などを使用し、美術2・3上では、木材に加え、革、金属（アルミニウム、銅、真鍮）和紙なども使用している。美術2・3下では、ハンカチ染め用の布、草木染を中心とした染料、アイデアスケッチに加え、加工粘土を彩色するなどしての試作が取り上げられている。

〔鑑賞領域〕

鑑賞活動は、知識によって作品を理解していくような一方的な受け身の行為ではなく、作品を「見る」ことによって生まれる印象や感動をもとにした深い読み取りに至る積極的な行為と言える。したがって対象を積極的に観る行為なくしては、鑑賞は成り立たないものである。つまり対象をよく観ることは、色や形、表現技法などの造形要素を読み取りながら、その背景にある作者の心情や精神性、時代や文化を知り共有することである。

表3　鑑賞

教科書	絵や彫刻などの鑑賞	デザインや工芸などの鑑賞	鑑賞の資料
美術1	●私が見つけた物語 ●花の生命	●伝統の中の動物たち	●鑑賞との出会い ●自然界や身の回りにある形や色
美術2・3上	●名画の魅力に迫る ●光が生むリアルとドラマ ●教科書美術館　東へ、西へ… ●漫画表現の豊かさ	●座ることから考える	●まちを彩るパブリックアート ●日本美術の展開と世界との交流
美術2・3下	●ここでシャッターを切った理由 ●教科書美術館　刻まれた祈り ●「ゲルニカ」は語る	●自然を愛でる空間 ●デザインで変える現在と未来	●日本の世界文化遺産 ●受けつぎつくる人の姿 ●アートを体験する場に出かけよう

鑑賞は、絵や彫刻などの鑑賞、デザインや工芸などの鑑賞、鑑賞の資料に分けられている。

鑑賞は、学習主題や学習活動に関することが中心となるため、2つの観点を合わせて総合的に考察を試みることにする。

美術1では、鑑賞の具体的な方法や活動について触れてから、絵の中に入り込んで自分なりの物語や意味を感じとること、花などの観察をもとにした作品の鑑賞、地域や文化の違いや共通点を感じ取る伝統文化の鑑賞などが取り上げられている。

美術2・3上では、作者の制作意図や工夫を読み取ることを主題に、光や陰影などの表現の工夫について探求すること、日本の美術と西洋の美術との関連性、さらに漫画に見られる多様な表現方法やインテリアデザイン、パブリックアートについての鑑賞も取り上げられている。

美術2・3下では、アングルやピントなどの撮影の工夫に着目した写真作品や仏像などの日本の仏教美術や伝統的な日本建築の鑑賞、時代や社会と美術との関係を探るべく「ゲルニカ」の鑑賞、さらに問題解決的な学習としての未来志向型デザインに関する鑑賞なども取り上げられている。

4. おわりに

中学校美術科教科書の内容について、前述の2つの観点から考察を進め、領域や分野の教材の傾向や特徴について明らかにすることができた。その要点について簡潔にまとめると、次のような点である。

学習主題や学習活動に関して、「絵や彫刻など」と「デザインや工芸など」では、表現、鑑賞何れの領域において、学年が進むにつれて、ねらいや内容の広がりと深まりが見られる。

絵画表現では、身近なものや風景、思い出の情景を単に表現することから、視点や技法、さらに時間による変化、空想表現へと広がり、彫塑表現では、観察を重視した表現から、生命観、躍動感の表現、イメージの単純化や強調などの表現へと広がりが見られる。また、デザイン表現では、身近な自然物を対象とした構成や伝達デザインの基礎となる文字やマークのデザイン、紙の加工など、デザイン表現の基礎的な内容から、ピクトグラムやポスターなどの具体的なデザイン表現、さらに空間や環境のデザインへと広がり、工芸表現では、粘土による器の制作を中心とした活動から、木、革、金属を用いた表現への広がりや染色などの表現技法の広がりが見られる。そして、材料や技能に関しては、何れの表現においても、扱いやすい紙や粘土などの材料、水彩絵の具やアクリル絵の具などの用具を中心とした表現から、多様な材料、用具による表現への広がりが見られる。

次に鑑賞では、「絵や彫刻など」と「デザインや工芸など」の何れにおいても、身近な作品から、日本美術と西洋美術の関連性の追求へと広がり、漫画やデザイン作品、パブリックアート等の鑑賞、さらに問題解決的な学習へと広がりが見られる。

このような考察結果をもとに、次稿では、表現領域における題材を取り上げ、具体的な授業構想と授業実践を通して、指導上のポイントについて考察したいと考えている。

参考文献

・大橋功、新関伸也ほか編著　2009年　『美術教育概論（改訂版）』　日本文教出版株式会社